

先人が丹精込めた 棚田を守る24軒の農家



熊本・水俣市 湯の鶴棚田管理組合



日曜日の朝九時、棚田の中腹にある管理小屋に三々五々、管理組合のメンバーが集まってくる。今日の作業は、農道脇などの除草と最上部にある田中國男（現・組合長）さんが所有するたんぼの田植えが行なわれる。田植えは、女性たちが中心になって植えていき、二時間ほどで作業が終わる。そのあと管理小屋に戻り、茶を呑み、ひとしきり雑談に花を咲かせたあと、それぞれの家の作業に戻っていく。熊本県水俣市の湯出地区にある棚田では、毎日曜日には、組合員が集まって、耕耘、防除、除草、植え付けなどの作業が行なわれている。このような共同作業は、かつての日本のいたるところで見られた光景なのだろう。

先人たちは高いところでは六メートルに及ぶという石垣を築き、水を引き、イノシシなどの獣害と闘いながら、営々と山の尾根まで棚田を広げていった。その棚田も、昭和三十年代にはいると、次第に上部から、杉が植えられ山林が広がっていった。担い手が高齢化するなかで、棚田も放置されるところが多くなったからだ。さらに減反がこれに拍車をかけていった。五ヘクタール、およそ二百枚の棚田を残すのみとなった平成八年、「今、



なんとかせんと、手遅れになる。棚田を復活させよう」という声が棚田の地権者の中から出てきた。

そのためには、まず農道を作ること。今までは、せまく傾斜がきつい栈道しかなく、耕運機をあげるのにも一苦労。これが大きな障害になっていた。そこで、初代組合長の小坂義孝さんが「農道を作ればなんとかなる」と述懐するように農道づくりをはじめた。市役所を通じて、国の棚田地域緊急保全対策事業を申請。県や市との紆余曲折を経た交渉の結果これが認められた。あわせて、地権者二十四名があつまり作られたのが「湯の鶴棚田管理組合」。平成十年七月に発足した。管理組合では、農道用地の無償提供や事業費七千五百万円のうち、十二・五％を管理組合で負担することにした。

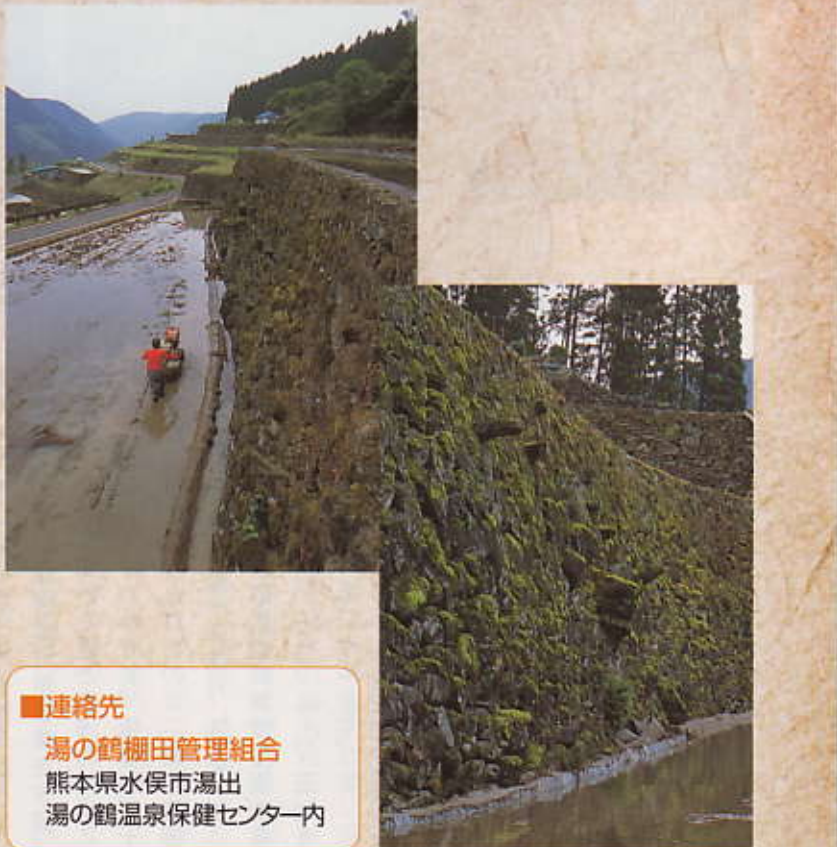
あわせて、遊休農地となっていた二ヘクタールの棚田の修復に向かう。石垣を覆い隠すほど繁茂していた草を刈り、バーナーで焼き、雑木を切り倒し、石垣の修復も行なった。この時には、組合員だけでなく、観光協会や市職員も応援してくれたという。

平成十二年四月、棚田を縦貫する全長七百メートル、幅四メートルの農道は完

成した。管理組合では、田植えや稲刈りなどの棚田を共同で維持する作業とあわせて、棚田を利用した新たな事業を展開していく。その一つが、湯の鶴棚田花公園づくり。遊休地となっていた棚田二ヘクタールを花の公園にする。ハーブ、ナデシコ、サルビアなどの花を組合員だけでなく、地元の子どもたちや婦人会の協力を得て植えていった。

そして、県やJRとタイアップして稲刈りなどの農業体験や棚田の散策をする「棚田ふれあい探訪ツアー」を平成十二年から、また、棚田を利用しているウオークラリーや鳳上げ大会などのイベントもはじめた。これからは、農道敷設の際、地元負担として管理組合が支出したおよそ九百万円の返済が大きな課題でもある。そのため、ツアーの参加費のほか、収入確保のため、管

理組合としてサラダタマネギの栽培もはじめた。棚田の麓には湯治場として知られた湯の鶴温泉がある。ここを訪れる観光客に公園で作られたハーブや野菜を販売する直売所「ゆのつる温泉・であい市」を開設し、販路の拡大につとめている。「結い」の心でつながった二十四軒の組合員の団結がこれから大きな力を発揮していくだろう。



■連絡先

湯の鶴棚田管理組合
熊本県水俣市湯出
湯の鶴温泉保健センター内